

狐にたぶらかされた両医

小丸 山名重勝筆録より

情勢が悪くなり、急に二人の医師永友文吉郎と、山名重勝が、さし向けられました。

鬼が久保の先の、下り松の谷間には、狐がたくさんいて、その巢穴が、所々にあるとの評判は、久しい。その付近の人で、その狐を見た人は、一人や二人ではなかった。

明治三十九年の、秋の日のことです。新小路の、城重雄さんが、国会議員に、立候補されて、町の大黒屋に、事務所がおかれました。ところが、投票の前



両医は、腕車（人力車）を連ねて、垂門、伊倉、平田方面を回りました。特に平田では、大歓迎を受けました。里芋、唐芋、そば切り、焼あゆの接待を受けました。

車夫（当時医者は皆、別当をおいて腕車をもっていた）も大変なご馳走になって、腹を満たし、たそがれの頃、帰路につきました。

途中、通山村を訪問した後、再び車は走り出しましたが、その夜は闇夜で辺りは真暗だったのです。当時の番野地平原は、下り松より北は松山で、一定の広さの道もなく、ただ、荷馬車を通った車輪の跡がかさなり合い、又交差しているなど、道とはいえない程だったのです。人通りも少なく、特に夜などは、通る人もいないのです。

この山の中の悪い道を、二人の車夫は、懸命の努力をしながら、二人のドクトルを乗せ、西へ、西へと進むのです。ところがしばらくして、二人の車夫がそれぞれに、方向が違うと、いい出したのです。既に、国道近くと、自信をもっていたのですが、耳をすますと、下の方から、潮騒の音が、聞こえてくるのです。

「ヤアー、これは大変だ。こゝは通浜の上だ」と

各々は驚き、梶棒を正反対の方向にして、車を進めました。それから西の方へ進むこと、一時間余り、老い繁った松山の中を、徐行しつつ、休憩しては又進んで行きます。とある松の大木のもとに來たとき、きき耳を立てみると、又もや潮騒の音です。四人共大変びっくりしましたが、皆、口には出しません。車夫は、いよいよ狐にやられていると思っているらしく、物騒な顔つきをしているのです。

しかし、車の上の二人のドクトルは、冗談半分に又、勇気づけるように、声高く詩吟を吟じ、或は声高く、談笑しているのです。今度こそは、間違いなく国道に出ると、半ば狂った様な主従でしたが、尚も不安な山名は、ふところから、ちり紙を取り出し、これをさいては、道端の松の枝に、結びつけて目印にしながら進むのです。二人の車夫は、既につかれが烈しく、又車上のドクトルも共に、心配そうに顔色もさえないのです。おまけに、車内に蓄わえていたローソクも、少なくなるばかりで、不安と焦りが、つのるばかりでした。

しばらく進むと、やゝ広い野っ原に出ましたので、車

を止めて、休けいしました。
放尿、喫煙、脱糞など、思
い思いに済ませますと、幾
分気持も落ちつきました。

再び、車を引きはじめ、
進みはじめました。しばらく
くいくと、やゝ道らしい道
にでました。黒土道でない
だけに、気持がよく、だん
だんと下り坂の様で、車が
大変軽くなったようです。
しかし、永友氏は、やはり
下り松の方を行く道だとい
うので、又引き返して、左
手の方向へ進みました。と
ころが途中に、山名氏が目印
につけておいた所に出たのです。
再び休憩が始まり、話し合った
末に、車夫が二手に分かれ、オー



ーイ、オーイと、
呼び合いながら国
道をさがしに行く
ことにしました。

二人のドクトル
は、もうつかれ果
てて、車の上でぐ
ったりとのびなが
ら、二人の帰って
来るのを、今か、
今かと、首を長くして
待っているのです。
山名がマッチをす
って、時計を見
ると、既に朝方の四
時になっています。
その時、時計に
ぶらさがっている
磁針を見ることに

気がついたのです。もう少し早く、取り出して見るべきだったと、苦笑しながら方向を見定めると、我々は今、南へ進んでいる事がわかりました。ならば右は、西の方角で、国道があるはずだ。丁度その時、西の方角から、車の響きが、きこえてきたのです。

「オー、馬車の音だ。馬車が国道を通る音だー」

と叫んだ。判った、すぐそこだ、下車して行って見ようか、といったその時、背後の方から、「オーイ、オーイ」と呼ぶ声がかかれる。こちらにも「オーイ、オーイ」と声高く呼び返す。提灯の火が見える、やがて帰ってきた車夫に、国道はすぐそこだ、といえば、彼等は全く信ずる様子はなく、

「私共は、先程の下り坂に辿りついたので、坂をおりると、一軒の山小屋があったので、その家の者に聞きますと、この坂は、平田におりる坂です。番の地に出る道は、右へ右へととって、南へ行くのです。というのです」

と、力なく報告するのです。

時計を見ると、四時半過ぎです。車をおりて、西へ西

へと進んでみると、数分で国道に出ました。

四人とも、思わず「バンザイ」と叫びました。

さて、いよいよ出発だと、二人のドクトルは、車に乗り込み、車夫は梶棒をとりました。ところが山名の車夫は、反対の方向に、発進しようしました。正反対の方向だったのです。

四人は、大笑いしながら、帰路につきました。その時は既に、東の空は白み、小丸川の渡船場で日の出を迎え、ようやくにして、大黒屋に帰りついたのです。

耳きり血の池の話

中尾 岩 切 ヒサエ

耳切りという、地名があります。

この土地では、高鍋藩が軽い罪人の仕置場として、耳を切り落としたところだと伝えられ、それでこの地が「耳切り」と呼ばれる様になったということです。

又、耳を切りおとした時に、流れた血が、一ぱいたまっています。池が出来たそうです。

私が、子どもの頃「そば」の花の咲く頃になると、上の原（牛牧）になば（きのこ）取りに、父母がつれていていました。

手かごをさげ、鎌を持って、松林の中に入ると、ケコロ、ハッタケ、ソーメンなば、しめじ、と、沢山とれましたが、耳切りの山には、決して近ずくなよ、といわれていました。

あの山の中には、死神がとりつく、魔の池があるから、いつも聞かされていたのです。

ところが、昭和の初め頃結婚した私は、耳切りの土地

に、住みつくことになり、松林の中に「なば」とりに行き、父が行くことを止めていた池の所にいったのです。

うす暗い山の中で、そこには、たゞみ一じょう位の平らな大きい石があり、その下には、かなけ水という、どろどろした水が、池一面に広がっていたのです。私は思わず身ぶるいし、まさに死神さまの池だなと、思わずにはいられませんでした。

平たい石の上に、罪人をねかして、耳を切り、流れ出た血が、池にたまった、血の池。なんだか気が遠くなりそうで、倒れかけましたが、やっとの思いでその場から離れたのでした。

今では地主も変わり、杉山となり、しいたけ林となっており、大きな石もどこにいったのか、わかりません。血の池も、澄みきった水となり、沢山の鯉が楽しそうに泳いでおり、死神もどこかに去り、栄養の神として現われ、豊かな耳切りとなっています。

片鬢おとしの松

山名 紫川

江戸時代の頃、不義（男女が隠れて愛すること）をした者は、規則を破った罰として、男でも女でも、片鬢を、そり落される罰を、受けることになっていました。

この処刑をされる場所は、道具小路の、田ノ上墓地の西南の隅で、大きな松の木のある所でした。しかしその松の木は、明治になってすぐ切り倒され、その跡にまた植えられました。

したが、終戦の頃に、全部切り倒されて、現在は全く残っていません。

この大きな松の木の下では、犯人が連れて来られると、刑場には幕が



引きまわされて、中では役人が大声で罪状を読み上げた上で、片鬢おとしの刑罰を、行なっていました。

外からは、その様子を見ることが、できませんでしたが、その付近を通る人とか、付近の田畑で働いている人などは、刑場の幕の内からもれてくる、男女の泣き叫ぶ声を聞いたということとです。

この話をきいたある人が「頭の髪の毛のない坊主や、尼さんが、規則を破ったらどうなるのですか？」
「……………」
と、いったということです。

直五郎さんの

潜水機

昔、平原の指小路に、直五郎

さんという、人がいました。

直五郎さんが、三十過

ぎの頃のことです。外国

の船が、美々津海岸の沖

で遭難し、沈没してしま

いました。ところがその

船には、多くの財宝が積

んでありましたが、船と

共に、海底深く沈んでし

まったと、いうのです。

直五郎さんは、その話を

耳にし、何とかして、長時

間人間を海底にもぐらせて

沈んだ財宝を引き上げたいと

思い、懸命に潜水装置の考案にとり



くみある考えを、思いつきました。

それは、透明な油紙で、大きな袋を作り、上部は水圧

に耐えるように固くし、その

袋を、頭からすっぽりかぶり、

首の処をひもでくくり、水の

浸入を防ぎ、水の中に飛び込

ませ、上の方から数人の者が

長い竹竿で、浮かび上らぬ様

に押しつける仕組でした。

いよいよ準備もとのい、

実行にうつす日が来ました。

場所は、平原下の御月の池で

水中に潜る人、上から押える

人というように、役割もきま

りました。

ところが、実験が始まって

からが大変でした。飛び込んで

間もなく、いかに油紙でも、水

にぬれては、ひとたまりもあり

ません。油紙はベトベトになり、口といわず鼻といわず顔一面に、ベッタリと吸いついてしまいました。その上首のところから、水が浸入し、全く息も出来ず、声も出せないので、大変な苦しみでした。

それに浮き上がろうと、水底でいくらもがいても、陸上の押し沈め役の、竹竿の繰つりが巧みで、浮き上がる事が出来ず、池の底で濁り水をガブガブ飲み込んで、全く半狂乱の状態でした。

やっこのことで、水の底から抜け出した、半死半生の男は、幸わいにも、この世の風を胸一ぱい吸いこんで元気をとりもどし、事の次第を、こまごまと話したということです。

この話を聞いた村人達は、直五郎さんの潜水法の構想は、いかにも滑けいだが、その発想は、まことに尊いと彼の創意を賞讃したということです。

大竜寺の宝もの

山川 紫川

寺院仲間の僧にも、一般の人の間でも、大変評判が悪かったということでした。

むかし高鍋、山の手の三か寺は、秋月家が天正十五年筑前の秋月より、お出でになったとき、共に移されたもので歴代の秋月家の、菩提寺でした。

大竜寺、安養寺、竜雲寺がその三つのお寺でしたが、その中で大竜寺は、一番りっぱなお寺で、あったといわれていました。

それでこの寺の住職は、常に多くの財宝を、寺の中に、ひそかに隠していたという、うわさでした。又その住職は、大変けちんぼうで、もらうことには笑顔で、出すことになると、渋い顔となるので



ところが、明治の初め頃のことです。三人の悪漢がいて、この住職を、亡き者にして、お寺の財宝を、盗み取ろうと、謀りごとをめぐらしました。

そこで、ある月のない夜の事です。

石原の東の方の田んぼあたりの、馬ん糞橋の北に当る、大平寺井手（水路）に近い、田んぼの中の、小さい塚（塚の中央には松の木があり、その下には、小さい墓石がたっている）の上で、夜も、しんと更けた真夜中に、ひそかに、相談を始めました。

その時、下を流れる小川の中で、うなぎ取り籠をつけるために、流れに立っていた、一人の若者がいました。塚の上では、三人の悪漢が、ひそかに話し合いを始め、その話し合う声は、水中の若者に、

手にとる様に、聞えてくるのです。以外な話に驚き、半信半疑でしたが、息をこらして、一言一句も聞きもらすまいと、耳をそばだてて聞いていたのです。

悪漢どもは、その夜の中に、目的どおり、その計画を実行にうつしました。

夜が明けて、その夜の凶行は、その日のうちに、藩内にくまなく伝えられ、高鍋上江の大評判となり、一般の人々は、ふるえ上がってしまいました。

しかし天は、この悪らつ非道な凶行を、許すはずはありません。三人の悪漢は、その日の夕方には、盗賊方の手で、とらえられました。

とらえられたいきさつは、鍛冶道具小路の目安箱に、前夜の密談を、細々と記した訴え書きが、投げ入れられたのが、きっかけとなったということです。

その後、三人の犯人は、厳しく処罰されました。そして、評判の金持の坊さんの所には、お金は勿論財宝も、何一つとしてなかったということです。